

声楽曲

スターバト・マーテル

戸作曲者

ロッシーニ (Gioachino Rossini, 1792 - 1868 [イタリア]) は、早熟の天才として傑作オペラを生み出し一世を風靡したが、わずか37歳の若さでオペラ作曲の筆を折った。前期ロマン派に属する作品群は、高度な技法を駆使する装飾歌唱様式を用いている。

戸楽曲について

若き日にナポリで、ペルゴレージ (Giovanni Battista Pergolesi, 1710 - 36 [イタリア]) の傑作「スターバト・マーテル」を聴き感動したロッシーニは、この分野を作曲することはないだろうと考えていた。だが1831年に破格の謝金でスペインの富豪ドン・バレラからの作曲の依頼があり、着手する。しかし、腰痛の悪化のために、既に書き上げられていた第1曲と第5~9曲以外の4曲を、ボローニャの作曲家タドリーニに委ね、翌年一応の完成を見てドン・バレラに渡された。41年にドン・バレラの死去後、その楽譜を手に入れた出版業者からの楽譜刊行の依頼に合わせ、タドリーニ作曲の4曲を作り直し、42年に初演され大成功を収めた。「スターバト・マーテル (聖母は嘆きてたがずみたまえり)」で始まるラテン語の歌詞に作曲された、この題名の多くの作品の中でも、ロッシーニのこの曲は、ペルゴレージ、ドヴォルジャーク (Antonín Dvořák, 1841 - 1904 [チェコ]) の同名曲とともに、「3大スターバト・マーテル」と呼ばれている。

戸鑑賞のポイント

●オペラ作曲の筆を折った後のロッシーニの作品の中でも最大の規模を持つ作品だけに、伸びやかな歌と明晰な色彩に溢れている。「あまりにオペラ風すぎる」という批判もあるが、十字架のもとで嘆き悲しむ聖母マリアをテーマとしたこの歌詞と、イタリア的な歌の解放感の奥にある真摯な「祈り」の心の関係に思いを馳せて鑑賞してみよう。

(國土潤一)

歌曲集「白鳥の歌」D.957

戸作曲者

シューベルト (Franz Schubert, 1779 - 1828) は700曲以上の歌曲を残したが、ほかに多数の器楽曲、室内楽曲、交響曲などを書いている。生前にはあまり認められず死後に高く評価されるようになった。1821年に歌曲「魔王」を「作品1」として出版するまでにすでに700曲に及ぶ作品があるといわれている。作品名に付せられる「D」の作品番号は、後世になってドイチュ (1883 - 1967) が編纂した作品目録の番号。

戸楽曲について

全14曲中、前半の7曲がレルシュタープの詩による歌曲、続く6曲がハイネの詩、最後の1曲がザイドルの詩となっている。「白鳥の歌」には、告別の意味がある。白鳥は死に臨んで美しい声で鳴くということに由来する。

シューベルトが生涯に作曲した700以上の歌曲の詩は、100人に及ぶ詩人にわたっており、中でもゲーテ (1749 - 1832) の詩に最も多く作曲している。シューベルトと同年の生まれであるハイネ (1797 - 1856) の詩に作曲したのはこれが初めて。後にシューマン (1810 - 56) が好んでハイネを取り上げ、歌曲集「詩人の恋」を作曲しているし、メンデルスゾーンは「歌の翼に」などを作曲している。そうした、詩人の側からのアプローチも興味深いであろう。

連作歌曲集ではないので、幾つかの歌をピックアップしてもよいだろう。よく知られた「セレナード」(第4曲)、特異な和声語法の「都会」(第11曲)、シンプルなピアノ伴奏で独特の世界を築く「影法師」(第13曲)など。以下に、「セレナード」の前半部の歌詞大意を載せておく。

「夜の闇を抜けて、私の歌はひそかに君に呼びかける。あそこの静かな森に降り、恋人よ私のもとにおいで。ほっそりした梢は月光のなかにざわめく。こっそり立ち聞きする人になんぞ、恐れることはない」

(伊藤康英)